

大陸（北支）

回想（北支春二部隊）

埼玉県 加藤 一夫

私は昭和十七年一月十日、東京赤坂の近衛歩兵第三連隊へ現役徴集兵として入隊しました。私の軍歴は大概左記のとおりです。

- 一、昭和十七年二月、北支馬干村後沢隊入隊。
- 二、十七年徴集兵の教育助手被命（広島県）。
- 三、迫撃砲教育を受ける（教官 佐藤信敬中尉）。
- 四、春兵团工兵隊へ工兵的教育に派遣さる。
- 五、他部隊へ「砦分隊」に属し臨時配属（邯鄲方面）。
- 六、装甲列車警備（十八年六月頃約一週間位）よく、四中隊の員数外になりませんでした。
- 七、秦皇島へ移動、極兵団より引継第一回の上番衛兵歩哨掛。（七月十日付陸軍兵長進級）。
- 八、給与掛、岩田伍長の後任、討伐、衛兵、多忙。
- 九、関東軍実戦教育に路上斥候として参戦。柴田隊長伝令高橋一陸上等兵と加藤と関東軍の兵一名との三名で数回。
- 敵兵二千、激戦。高橋上等兵と二人で敵兵三百の高地を先制攻撃占領し、一個連隊の危機を救う。武功章に縁なく残念。（鉄帽に敵弾あたり、成田山の木札のお守りが割れた）。
- 十、ソ連参戦時古北口。北方の小哨分隊長。
- 十一、二十年十一月、石匣鎮の激戦配属重機の援護

分隊長として三日間戦闘に参加。奇跡的にも四年間無傷、入室入院なし。多謝。

私の入営当時の家族構成は、

父 健 町役場吏員 出征中
母 " " " " " "

本人 " 長男 東京電灯KK社員

次弟 " " " "

末弟 " 学生

次妹 " 女学生

末妹 " 小学生

父の關係で戦地より留守宅送金あり。

生活不安なし。

以上のようなことで、ちょうど内地は大東亞戦争開戦直後の緒戦の大勝利で沸き立つ状況でありました。

第一乙種合格の私は町内二十人以上の壮丁と共に駅まで行進し、歓呼の聲に送られて尽忠報国の決意をより固め、列車で上京、近歩第三連隊佐藤隊へ勇躍入隊しました。

昭和十七年一月二十日、赤坂の部隊出発、品川まで

行軍、列車輸送により広島まで、さらに宇品より乗船して釜山へ、再び列車により奉天、山海関（二月早々）經由北支晋県で下車しました。石徳線（石家莊（徳州）の石家莊東方の晋県です。列車より降りてさらに東方十キロの馬干まで駆け足でした。

転属先は春二部隊第四中隊（北支派遣 独立混成第八旅団独歩第三二大隊第四中隊）であります。

初年兵として馬干に到着した夜は、早速敵兵の歓迎行事としての夜襲を受けた。パンパンと銃弾の洗礼には、心強い先輩古兵の指導のもとに一兵の損害もありませんでしたが、「ああ、野戦へ来たんだ。頑張らねば」との覚悟を新たにし、緊張もまた一入であった。

初年兵教育の掟として、曹長は「兵は叩いて鍛えよ」との方針で、もう徹底的に鉄拳制裁を受け、一日に何十回も殴られた。今思えばよく耐え忍んだものどっとする（次年度兵より制裁禁止となった）。

こうして毎日毎日叩かれ叩かれて自殺を何回も考えた程苦しみつつ、初年兵教育を受けました。三月には部隊移動で広宗へ移り、その間討伐もよくあり、教官

が負傷したこともあり、教育と実戦が否応なしに渾然一体となり、野戦第一線部隊ならではの初年兵生活を過ごしました。その期間特に辛かった思い出を述べます。

北支では独特の黄砂現象があります。西方の砂漠の細かい砂が強い西風に煽られて黄塵万丈そのもので、眼も口も開けられず、まるで黄粉にまぶれたようになります。教育、演習、討伐から帰隊すると、われわれ初年兵はわれ先にと奪い合って班長、助手の小銃を買い、帯皮を買い、巻脚絆を解き、軍衣袴のほこりを払い、「御苦労様でした。お疲れでしょう」と言っでは班内へ帰って貰います。この模様は全国一律の麗しい情景であった。

ところが班長や助手は楽でよろしいが、初年兵はもう大変である。上級者の兵器、被服の手入、食事、洗濯と自分のことまでは手が廻らぬ超多忙を極める。そのため時として兵器、被服の手入れなどに落ち度が出てくることもある。私が一度小銃の手入れに不都合がありました。

ちょうど黄砂に出会って帰隊、上級者の分を先にやり、その後自分の兵器等の手入れを終わった際でした。突然班長が来られて、班員の銃の検査を始めました。運悪く私の銃の黄砂が一部拭き残っているのが発見され、銃を班長室へ取り上げて私に返して呉れません。私はもう大変なことになり心からお詫びをしましたが、班長は一向に聞き入れてくれません。上等兵、古兵から気合を入れられたことは申すまでもなく、私は到頭泣きながら謝ったことです。でも聞き入れて呉れません。

二日間食事もとらず、一生懸命に謝り続けました。しまいにはもう、どうしてよいか判らず、自殺も考え始めました。憎い班長を殺して自分も死んでやろう。物騒な考えです。また短い人生の生活の一駒一駒がとくに入営時の家族の、町長の、会社の上役の激励の様子等が走馬灯のように頭をよぎります。食事もとっていないので、もう瀕死の状態で正常な判断力もない時点でした。

お隣の班長の仲介でやっと許して貰いました。私の

軍隊生活で忘れることの出来ない辛い辛い思い出です。自殺も考えた位です。訓練、行軍、その他何でも来い、この面での苦勞はなかった。元氣一杯、真面目に頑張ったので進級の度毎に、七個中隊を通じて常に序列一番で貰き通し、終戦時は軍曹でした。とにかく負けず嫌いで努力をする。人生これしかない。

『河北の邦人四十万人を守った春兵団の誇り』

これは春兵団の將兵以外は知らないし、また兵団の戦史にもほとんど記録されていない、国民も知らぬ輝かしい兵団の功績であり、われわれ一生涯の誇りである。即ち春兵団の最大の努力により北京、天津地区において満州のような悲劇が避けられた。あるいは長城線に散り、あるいは遠くモンゴルの地に眠る春兵団將兵の御魂に捧げる。

支那派遣軍は、概して中共軍に対しては強硬であったが、ソ連軍に対しては態度が動揺していたといつてよい。

現地の事情にうとい大本營の「即時停戦、武装解除受諾」の命令（八月十八日付、大陸命第一三八五号）

に従い、十九日午後一時三十分、北支那方面軍司令官に対して「ソ連が蒙疆方面に突進するに当たりては、戦闘行動を停止し、適宜局地停戦交渉及び武器引渡し等を実施すべし。なほ状況之を許せば、予め軍官民を京津（北京、天津）地区に撤収するに努めるべし」と命令を下した。

北支方面軍の対ソ連防衛は昭和十七年以来もっぱら内蒙古の防衛が主体で張家口前面の長城線に陣地を構築した。古北口、山海関方面はもっぱら精銳関東軍の守備範囲である。

北支軍としては、対ソ防衛など考えてもいなかった。八月十三日には熱河省防衛を主体とする関東軍西正方面軍司令官は、ハルビンと大連の鉄道沿線に総退却の命令を下達したのです。

当然、北京、天津の対ソ防衛の重点は最短距離にある、古北口に指向されるようになって来た。しかし、春兵団が古北口に足を踏み入れたのは終戦わずか半月前で、関東軍はすでに撤退した後だったので。

八月二十一日古北口に於ける千八百八十三名の抑留者、

この尊い犠牲によって、ソ連軍の北京東方よりの進出を阻止し、また春三部隊配属の響兵团（独立混成第二旅団）の張家口での戦闘によって、北京西北方よりの進出を食い止めることが出来たのです。

河北在留の邦人四十万人の生命を守り、満州におけるような孤児の発生を未然に防止し得たことを春兵团の一員として誇りと思っております。この陰には古北口で千百三十八名というモンゴルへの抑留者、春二部隊の八月三日から五日まで石匣鎮の戦闘で約五十名、春三部隊の八月二十一日張家口で約五十名という戦死傷を含めて約百名に及ぶ尊い犠牲者のあることを忘れることは出来ない。

『石匣鎮の戦闘』

終戦後日本軍の武装解除は国府軍によって行われる予定であった。

終戦と同時に満州国を制圧したソ連軍の先鋒部隊ソ蒙軍（戦車を含む）は、数日後には春兵团警備地の万里の長城線古北口に到着した。我が軍の無抵抗を幸いに一気に大隊本部である石匣鎮まで追撃して来て、城

壁を包囲し武装解除を再三迫って来たのである。しかしこうした協定違反に応ずることの不可能を伝え一戦を交える構えを決意した。たまたま期を一にして師団より戦車隊の応援が到着し、我が方の意気盛んとなった。これによりソ蒙軍は包囲網を解き古北口に退き、ここにおいて応対した。こうした状況下で約三か月が過ぎて国府軍の到着も間近い秋深い日の出来事であった。

十一月三日、明治節である。この日戦場における最後の祝日として石匣鎮本部では演芸会の催しがあり、各中隊共夕刻まで楽しみ帰隊して行った。丁度その時刻一発の迫撃砲が部落内（中隊本部）で炸裂した。それに続いて何発もの砲撃が数を増し負傷者も出始めた。重機関銃隊が部落東北の地に設置された。部隊本部よりの応援である勝戦に威を燃やす八路軍は、ソ蒙軍との間に割り込み一部の武装解除を狙い、漁夫の利を得るがためか兵团全線にわたる総攻撃をかけてきた。装備も充実し士気もあがる彼等八路軍は、勇敢かつ頑強そのものである。

特に石匣鎮本部の攻撃拠点でもあるわが中隊の守る
廟高地に集中攻撃をかけてきた。夜もふける頃高地頂
上の分哨が焼かれた。小哨全員が火の玉となって守り
続けた。五十メートル内外の頂上の争奪に何回か白兵
戦が続いた。そして遂に奪回に成功したのである。分
哨員、小哨員の奮闘に心から敬意を表する。

この日は夕方から翌朝まで銃砲声が豆を煎るよう
響き続いていた。お隣の第三中隊の守る大屯高地も同
様に白兵戦があり、死傷者多数であった。十一月三日
より五日まで死闘を繰り返した。私はこの戦闘に
分隊長として参加、重機関銃の援護をして白兵戦を展
開、遂に敵を撃退した。思い出深い石匣鎮攻防戦であ
る。よくぞ無事に生きて還ったものと感無量、併せて
多数の英霊に謹んで深く哀悼の意を捧げる。

『伊太利の降伏』

昭和十八年九月十日頃、話はさかのぼるが、一つの
思い出がある。当時私の所属する第四中隊の警備地で
あり、滿支国境「万里の長城」東の起点である山海関
の伊太利軍一個大隊接收を思い出します。

昭和十八年七月我が独混第八旅団は河北省南部地区
から転戦して、冀東地区即ち山海関以西万里の長城以
南天津付近までの鉄道及び重要な炭鉱を含む広大な山
岳地帯で、増強いちじるしい中国共産党軍と寧日なき
戦闘を続けていた。

山海関の二つ駅西の港町「秦皇島鎮」に私の第四中
隊が駐留し討伐、警備に明け暮れていました。そんな
昭和十八年九月某日、伊太利は降伏をして、突如同盟
国から日本軍の敵国となり、山海関駐留伊軍一個大隊
の武装解除が我が第四中隊に下命されました。

第四中隊（隊長床次中尉、宮崎県出身）の精銳約二
個小隊、重、軽機、擲弾筒装備を以て、伊軍一個大隊
との決戦を覚悟し、トラック四輛に分乗して山海関へ
急進した。私は当時陸軍兵長で、尖兵分隊長として伊
軍兵舎に接近、敵の抵抗に備えて葡萄前進により衛兵
所前約百メートルにて突撃態勢で、敵情を偵察したが
どうも無人のようである。勿論射撃もしてこない。私
は先頭に立って衛兵所へ進入したが、軽機、小銃数丁
が立てかけてあり、室内はガラシとして無人、われわ

これは呆氣にとられながらも内心ホッとしました。

宮庭を眺めると、何と彼等伊太利兵数百名が嬉々としてバスケットボール大会をやっておる。国民性の違いとはいえ全く驚き入りました。われわれ日本軍は直ちに伊軍を集合させ、即時全武器を接収して彼等を山海関駅から貨車輸送により、北京の方面軍へ送りつけた。伊軍の家族たちが沢山出て来て、泣き叫んで別れを悲しむ姿に胸を打たれました。その後の伊太利軍はどうなったかかわれわれは知らない。

かくして尽きぬ回想に若き青春の年月を委ね、漸く五体無事で昭和二十一年一月二十六日、佐世保へ上陸、一月三十日懐かしい自宅に帰り着いて、母や家族と対面、復員完了しました。

内地帰還後、東京電灯へ復職し、二十三年結婚、子供三人、孫七人に恵まれ、有り難い太平の御世を楽しませて頂いております。

戦争が終わって、兵の、戦友の、その死が何の意味もなかったなんて思いたくない。この平和はあの尊い血潮の上に築かれた平和であるから。それだけになお

さら、大切にしたい。

息子達よ、孫達よ。

父親の、祖父の、つたない文章を、

戦争に生きた我々の青春の歴史をどんな気持ちで読んでくれるだろうか。

戦車第三師団工兵隊

河南作戦

埼玉県 小山 正三

私は第二国民兵でしたが、第二国民兵役も繰り上げ兵役に服することに改正になった新聞報道のあったその日に赤紙召集令状を受け取りました。当時私は二十九歳、妻と子供二人、材木関係の会社に勤めていました。

一期の検閲まで内地の原隊で教育を受け一等兵に進級、同時に蒙古の包頭の戦車第三師団の直協工兵隊に派遣されました。包頭に駐留中「ゴビ」砂漠の中の